

を及ぼした。

- (イ) 火の火加減不充分で多く燃料を要した。
- (ロ) 料理法として大豆は水煮後豆乳ひじきと共に煮物法も考へられる。
- (ハ) 生産品は少し高くなるが保良上醤油の量を増加するが良い。
- (ヘ) 同製品は保良性を工夫すれば鹿児島向製品として有望であろう。

(6) 試 売 結 果

民間業者、石原昌一郎氏に依り市場試売されたが、売れ行き良好であつた由報告があつた。

・ 琉球近海に於ける有用介藻類及び棘皮動物の棲息状況調査

琉球近海に於ける有用介藻類棘皮動物の種類状況を調査し、将来これらの利用開発の資料に供せんがため昨年度に継続して実施した。

〔一〕 中城浦沿岸

1. 調査場所及び期間

場 所 知念村（俗称ウカビ、タマカ島周辺リーフ）

西原村（津波地先、俗称ノーアイビレ、タカシ浅海リーフ）

期 間 1956年9月11日～12日 2日間

調査方法 本所試験船 鶴丸（5屯）使用、水深及び潜りに依る。

イ・礁（岩礁地帯）干渉帶及び三等線以内の採取標本

四 鹿 村（津波地先リーフ）	知 念 村（ウカビタマカ島周辺リーフ）
甲殻類、口脚類 やどかり類、あなじやこ、ひらじやこ、圓形に ひらいそぶに。	やどかり、ところがに、かのこ、てうがに、しようじ んがに、しゃこもどき。
軟體動物 ひざらがひ、つりひらけし、高脚貝、玉貝、く も貝、腕足あこやがひ、高脚貝、うみにな。	ひれこやしがひ、うみにな、青色だから、あまをぶね 八丈だから、かりかむり、うしのあし、うしのつめ
腔腸動物 水くわげ。	水くわげ。
棘皮動物 ばふんうに、あかうに、むらさきうに、がせ、 くもひとで、くろなまこ。	ばふんうに、むらさきうに、じつけに、がせ くもひとで、くろなまこ、じやのめなまこ
磯魚類 べら類、にぎだひひめじ、其の他深海性。	

* ラニカの種類状況調査

A. 西原村地先リーフ

中城湾内に面してゐるリーフ（俗称西原ノイ・ビシ）は岩礁より成り、底質は砂利、砂泥混りが多く、干潮時露出するがそれより縫やかな傾斜をなして崩がつてゐる。その3等礁内では貝類が棲息し（主に高瀬、巻浦、くも貝）又は採集者もこの「ビシ」に来るようである。其他に「なさこ」「がぞね」が多く、2等乃至1等礁内では現在「ばふんうに」群棲するのを見受けた。1等礁内には「裸うに」が棲り採取適期で、すでに産卵せしものも見受けた。

「むらさきうに」は干潮露出礁の岩盤上に多く、最大巣径5個で抱身巣数2個位を示し色合も良好であるが底質原料として供試したる事はない。尚1等礁内では黒蝶貝（稚貝）を採取したが極稀にしか見られない。

高瀬は「いしも」千ちみうちわ」「岩ごけ」等で深所に「みる」類が見受けられた。結び、「うに殻」は現在平均熱度を示めし、粒も細い採取適期であるが原料競争の結果、内巣に多く泥沙を含んでゐるため、浮游は用心の注意が必要である。

B. 知念地先リーフ

中城湾入口に面し外海の影響を受け（俗称ウカビ）岩礁より成り、底質岩盤上に砂、砂利混りでリーフの南西側は広い砂丘を成してゐる。干潮時は殆ど露出する礁の周囲には浅い海溝状を呈し稍々斜面に起伏状態を成す。

3等礁附近には主に貝類「ひめしやこ」が棲息し、砂丘一帯は「じやのめなすこ」が見受けられ、2等礁内に「ばふんうに」が群棲してゐる。

結び、「ばふんうに」は目下抱卵期を示めし巣径7個大のものは卵色良好で採取適期である。尚、原料競争の結果、胃袋内は鮮糞藻類（ほんだわらみる）が多く成育状態は前区西原地先に比較してよい様に思はれた。

ターカ島周辺は波浪高さため潜り困難で調査出来なかつた。

2. 生産予想調査（うに）

地 区 別	種 别	用 量 生面積	年間生産量予想高 採 齡 量 里	利 用 度	採 取 期
西 原 地 先 浅 海 リーフ	ばふんうに	50箇位	320箇位	1953年漁業課により地質製品として販売された。	4月～5月 9月～12月
知 念 地 先 ウ カ ビ タ マ カ ビ	ウ	30箇位	800箇位	1954年沖江漁業により利用（研究所試験調査。）	7月～11月

備考：西原地先浅海リーフ、生面積は9月現在、1日5箇位の速を採取を生産するとして10日間の採集の場合を示す。

知念地先ウカビ・タマカビ、年間生産量は1952年度研究所調査予想高による。

（知念地先ウカビ周辺リーフを含む）

3. 調査略図及歩留表

